

外国語のクラスで 異文化・対人コミュニケーションを 教えることの重要性

アビゲル・キャラハン
カリーナ・コーゲダル

齋藤-アボット佳子教授
関根繁子教授

概要

- 研究の重要性
- 研究質問
- 研究背景
- 研究方法
 - 対人コミュニケーションの定義
 - 対人コミュニケーション: 日本とアメリカ
 - 適切又は不適切な対人コミュニケーション
 - 異文化間の対立
 - 異文化の定義
 - 外国語の教育法と外国語のカリキュラム
 - 外国語のクラスに関する問題
 - 個人の成長と留学の影響
 - 異文化コミュニケーションに対する他の影響^{1&2}
- 調査結果
- 結論
- 調査文献
- 感謝の意

研究の重要性

- カリーナは日本の立命館大学で留学をした時に、異文化コミュニケーションと心理学を受講し、異文化コミュニケーションについて学んだ。
- アビゲイルは日本語を勉強する前に、演劇やスピーチコミュニケーションのクラスを勉強し、人がどのようにコミュニケーションをとるのかについて興味を持った。
- 世界のグローバル化と多様性がある現代の文化を理解するために、異文化コミュニケーションの知識は大切だと感じた。
- この研究では外国語のクラスや留学中の経験が異文化コミュニケーションを円滑にするのかについて探っていきたい。

研究質問

1. 外国語教育はどのように実生活で使える言語能力取得に貢献しているか
2. 外国語授業の中では習得できず、留学により習得できる異文化理解にはどのようなものがあるのか。
3. どのような文化的偏見が適切なコミュニケーションに影響を与えるのか。

研究背景

- 対人コミュニケーションの定義
- 対人コミュニケーション: 日本とアメリカ
- 適切・不適切な対人コミュニケーション
- 異文化間の対立
- 異文化の定義
- 外国語の教育法とカリキュラム
- 外国語のクラスに関する問題
- コミュニケーション能力と留学
- 異文化コミュニケーションに対しする他の影響1&2

対人コミュニケーションの定義

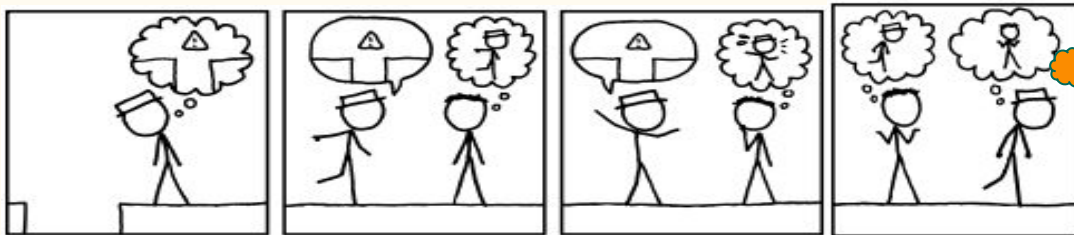
- 人々が言語的又は非言語的なメッセージを使う時に、感情や意味、情報を交換することである。
(SkillsYouNeed, 2015)

言語的メッセージは、電話や直接会って考えや意見を話すこと。

非言語的なメッセージは、考えや意見を伝達するために、表情や体の動きを使うこと。

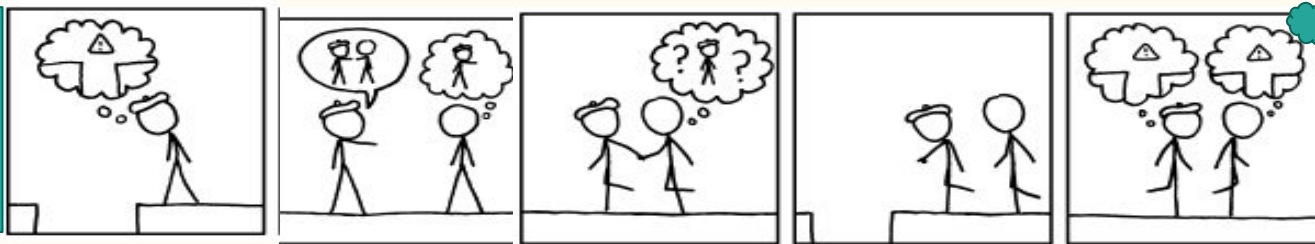
適切・不適切な対人コミュニケーション

違うコミュニケーション・スタイル



わからない。

同じコミュニケーション・スタイル



わかる！

- 同じコミュニケーション・スタイルでは円滑な話が維持される傾向にある。しかし、違うコミュニケーション・スタイルでは会話について数多くの問題が生じる。
- 異文化コミュニケーションにおいて何が適切か不適切であるかを判断するために、異文化によるコミュニケーションスタイルの理解が重要

対人コミュニケーション：日本とアメリカ

日本のコミュニケーションスタイル

- 人との調和を大切にする。
- 人間関係と集団主義の大切さを強調。

(Ramsey, 1979)

アメリカのコミュニケーションスタイル

- 実用的コミュニケーションスタイル
- 個人主義の大切さを強調。

(Ramsey, 1979)

異文化間で起こる対立の例: 相槌

- 「相槌」: 会話中にしばしば挿入される間投詞のこと
- 英語では「oh」や「uh huh」、日本語では、「はい」・「うん」・「ああ」等

日本

相槌をすることにより話す相手が会話を聞いているということを示し、丁寧な態度だと思われる

アメリカ

相槌を頻繁にすると話している相手の会話に興味がなく早く終わってほしいというぐさになり、失礼な態度となる

(Hanzawa, 2012)

異文化の定義

- 異文化:「生活様式や社会習慣、ものの考え方などの異なる文化。」
(デジタル大辞泉, 2015)

- この研究では以下の二つの環境について調査した。

- 母国の外国語のクラス
- 留学先の外国語のクラス

外国語の教育法とカリキュラム

	アメリカ	日本
団体名	全米外国語教師会 (ACTFL)*1	文部科学省*3
法律	州ごとに異なり一貫性がない:州によっては、必修言語ではないところもある*2	教育の上の基本法は英語を促進するために 2008年にMEXTによって計画が作成された。英語は小中高で学ぶことの義務化*3
教科課程	[教科課程ではなくガイドライン]「5Cのスタンダード」: コミュニケーション、文化、コネクション、比較、地域社会*4	読み方、書き方、話し方、会話の意図を理解すること*3

外国語のクラスに関する問題

- 日本でもアメリカでも、外国語のクラスでは会話を勉強するが、表現の暗記で終わり実際会話ができる能力が身につけていない。

日本

ネイティブ・スピーカーがいないので日常会話の学習が難しい

(MEXT 2010)

アメリカ

「スタンダード」に基づきクラスでコミュニケーションのしかたを学ぶがオーラルのコミュニケーションには不安感が生じる。

(The 5 Cs: Standards, 2015) (Koteková, 2013)

コミュニケーション能力と留学

- 「留学経験は、学生が異文化間のコミュニケーションの習得に役立つ上、学生は異文化に対しより広い認識を持つことができる。」

(Schnickel, 2010)

留学から得られたこと	学生の回答
個人の成長: 自信や成長が助長された。	<u>96.5%</u>
交流することで得られる効果: 異文化に関する知識や偏見に対して認識できるようになった。	<u>96%</u>

(Dwyer, 1999)

異文化コミュニケーションに対しする他の影響1

- 「文化的な価値志向:お互いのやり取りを理解し,適切なコミュニケーションについて決定するときの基になるレンズを作り出す方法。」

(Ting-Toomey, 1999)

- 文化的偏見が外国語教育における異文化コミュニケーションにどのように関係しているのか。
- 留学は、どのように文化的偏見を減少させるのか。

文化的な価値志向



文化的偏見

(Hofstede, 1991)

異文化コミュニケーションに対しする他の影響2

アメリカ文化の価値

短期的な 価値:

個人の尊重, 個人の顔を大事にする

弱い不確実性回避文化:

不確実性が評価される

リスクを 追う。対立には肯定的

個性的な文化

個性的な目的

個性的グループを重視

自派的 相互関係

日本文化の価値

長期的な価値:

縦社会を重んじるの尊重, グループの顔をたてる

強い不確実性回避文化:

不確実性は評価されない

慎重に行動する、対立には否定的である。

集団主義的な文化

集団主義的な目的

グループを重視

義務的な相互関係

研究方法

研究方法

調査参加者

- 大学生59人
 - アメリカ人28人
 - 日本人31人

参加資格

- アメリカ又は日本で留学したことがある大学生
- 英語又は日本語を外国語として勉強したことがある大学生。

調査手段

- オンラインGoogle・フォームによる調査
- **英語**のアンケート
- **日本語**のアンケート

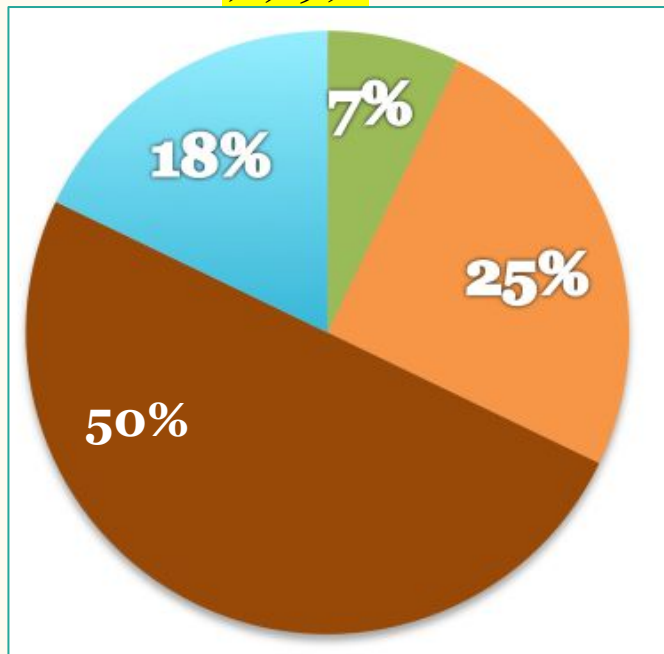
この調査への参加者:

- 参加者はアメリカ又は日本に留学したことがある大学生。
- 英語又は日本語を外国語として勉強したことがある大学生。

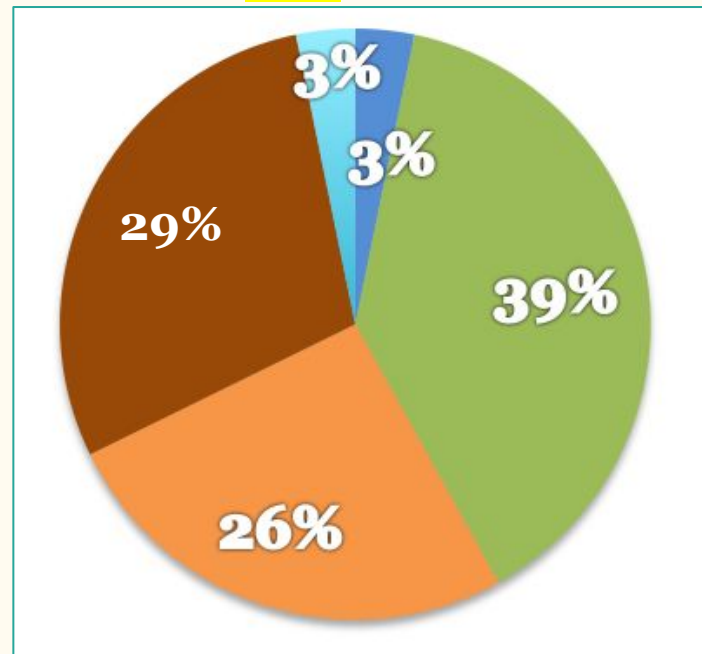


参加者について： 学年

アメリカ

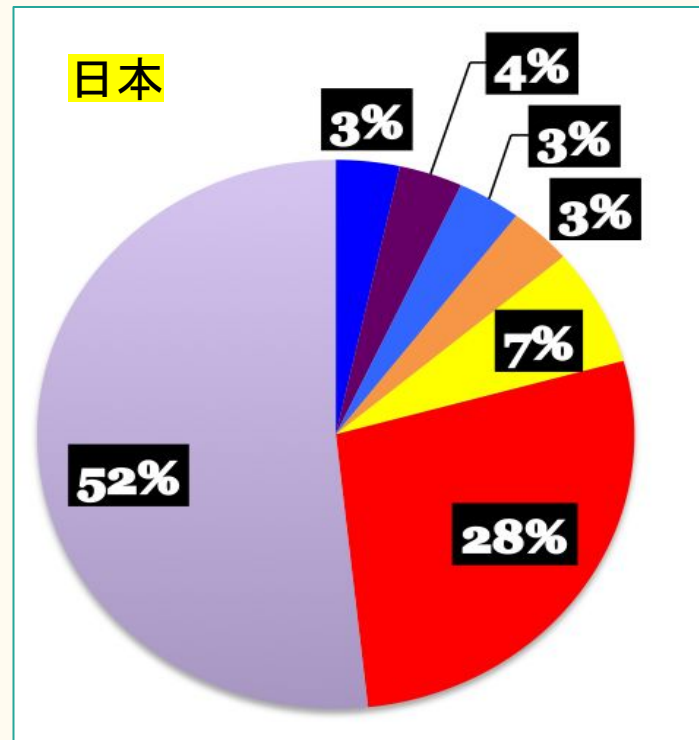
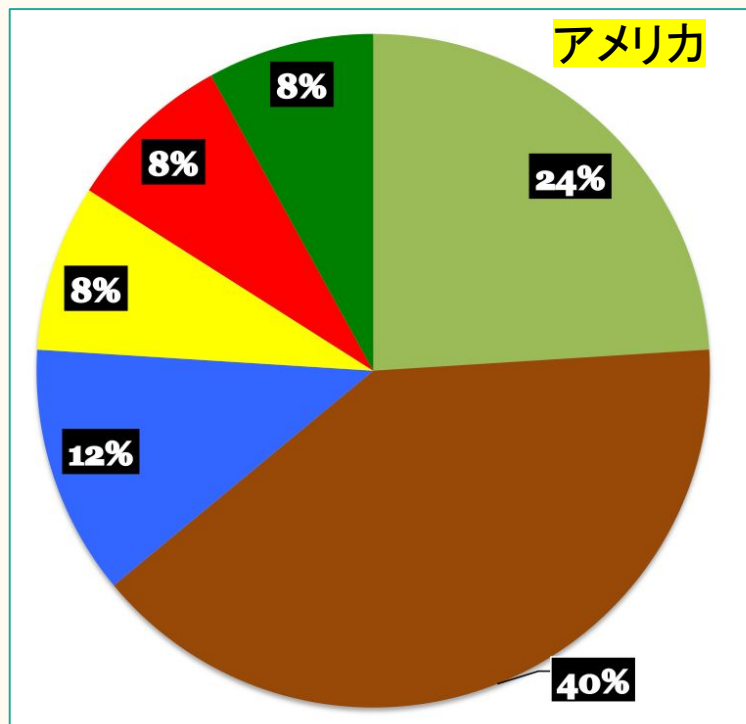


日本



アメリカ人の大半は 四年生で日本人の大半は二年生である。

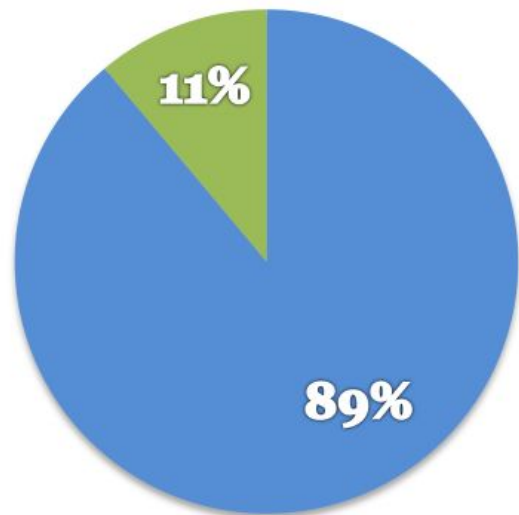
参加者について: 外国語の学習経験



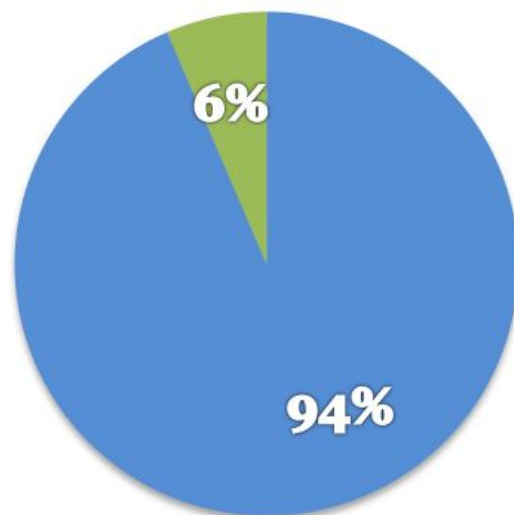
日本人の80%が7年以上外国語を勉強した経験があることに対して、アメリカ人は3-4年と答えた学生が40%。

参加者について:留学した国

アメリカ



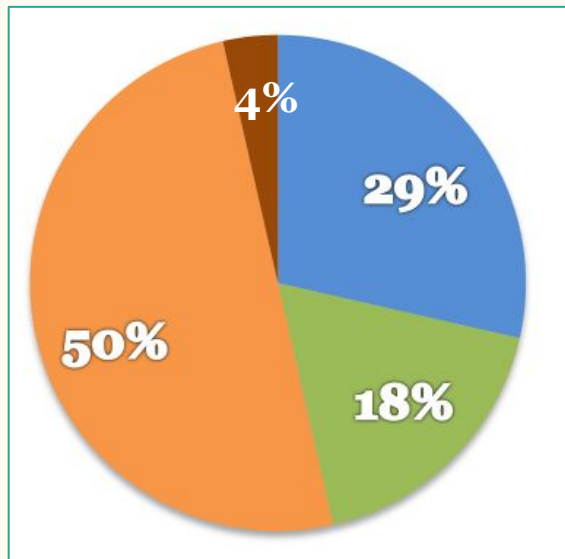
日本



アメリカ人の大半は日本へ、日本人の大半はアメリカへ留学した。

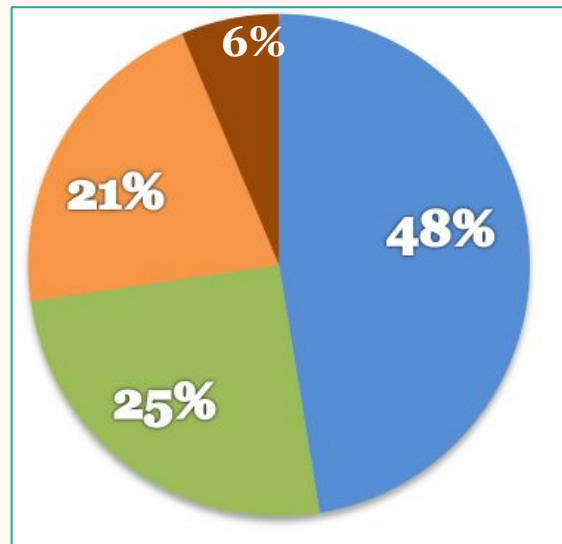
参加者について:留学した期間

アメリカ



- はい、今留学しています。
- はい、一学期留学したがあります。
- はい、一年間留学したがあります。
- いいえ、留学したがありません。

日本



アメリカ人の50%が一年間留学した経験があると答えの対し、日本人の48%は現在留学中である。

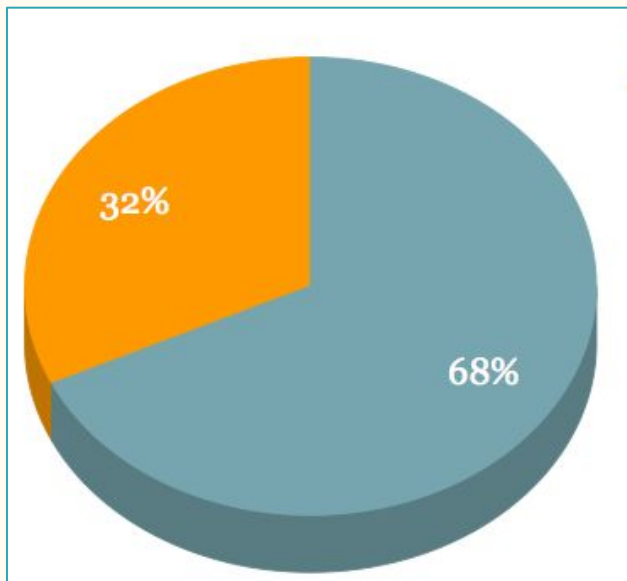
調査結果

研究質問一

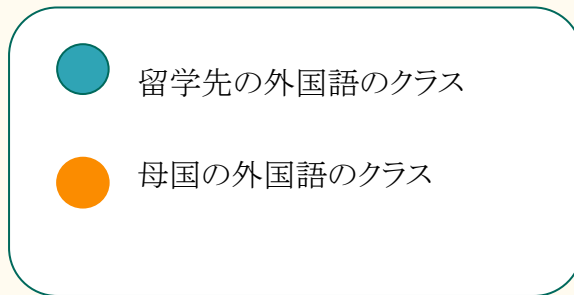
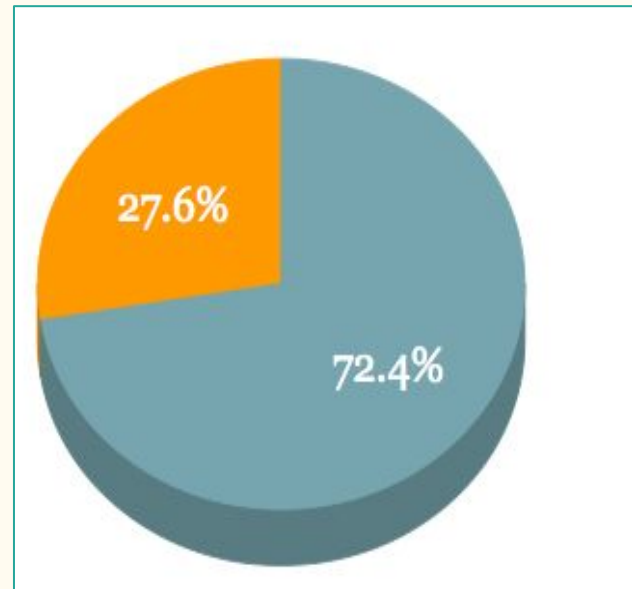
大学生の目標言語の文化に対する意識に外国語教育はどのように影響するのか？

どちらのクラスの方がその国の人と交流する時に自信を持ってコミュニケーションをとることができますか？

アメリカ

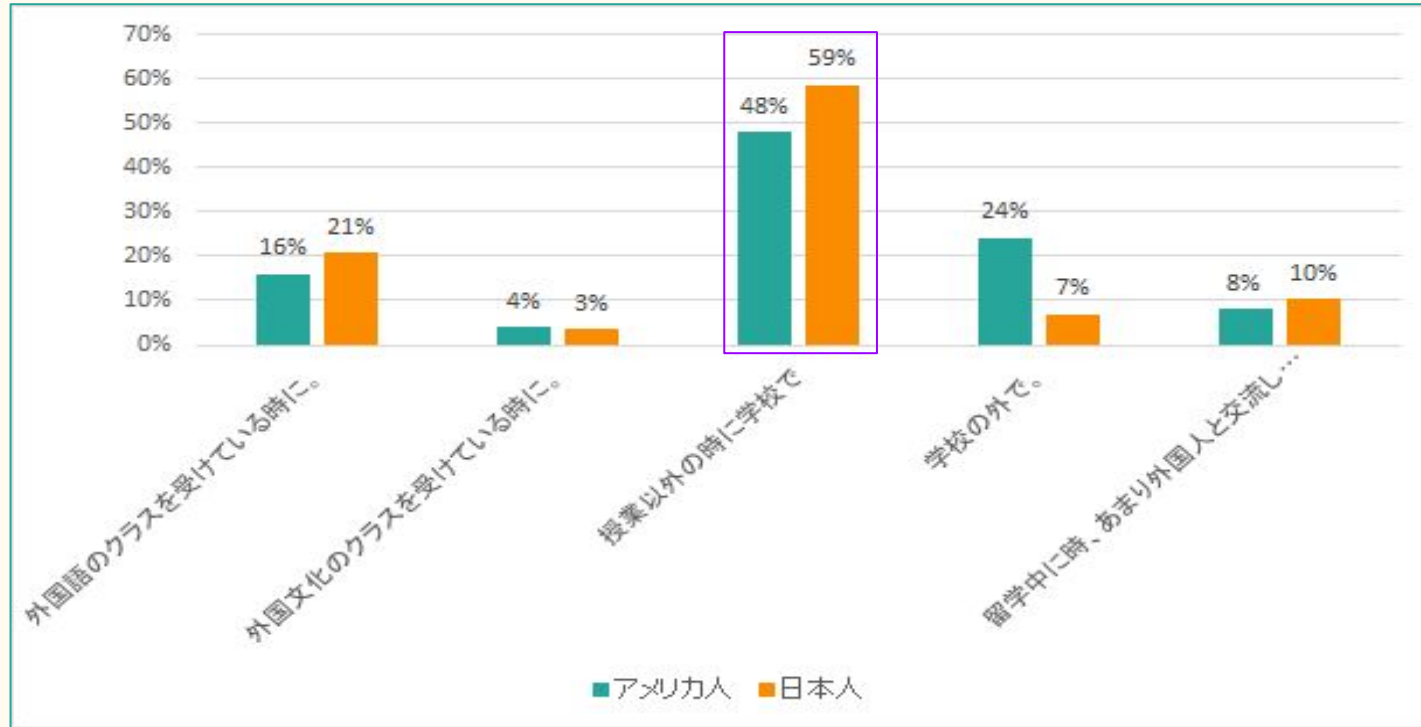


日本



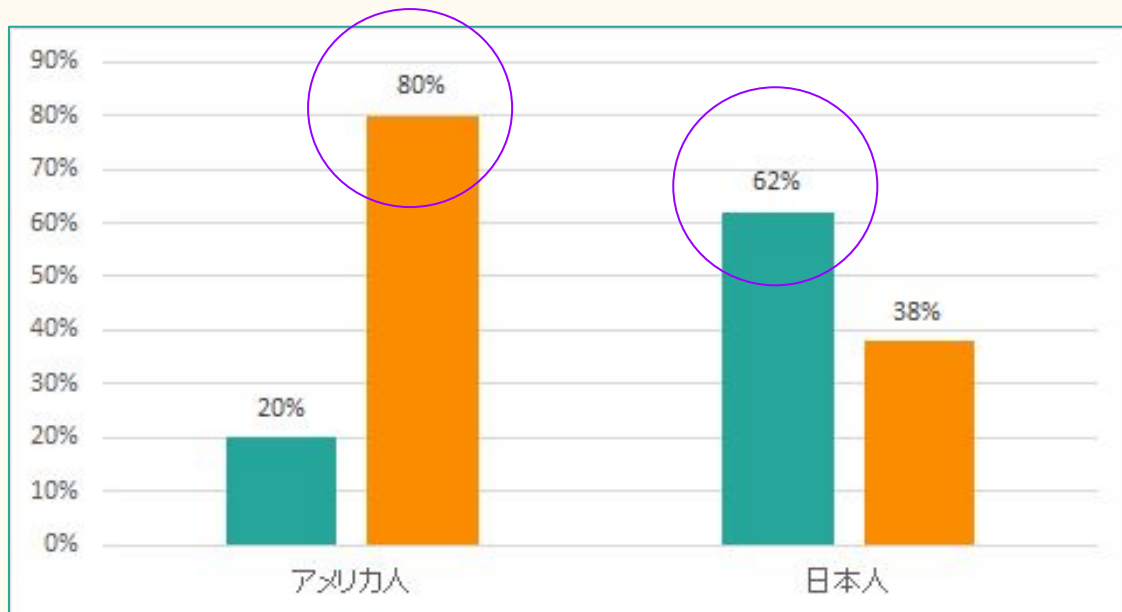
日本人もアメリカ人も大半の学生が、留学先での授業で異文化コミュニケーションへの自信がついたと答えた。

母国の大学のどこで留学生と一番多く交流しましたか？



日本人とアメリカ人の大半は、学校のキャンパスで留学生と一番多く交流する機会があった。

母国のキャンパスで留学生と交流する時(例: サークルやクラブ活動の時、食堂にいる時など)、どちらの言語をより多く使いましたか？



母国でアメリカの学生は英語を使うが、日本の学生は母国でも英語を使っている。

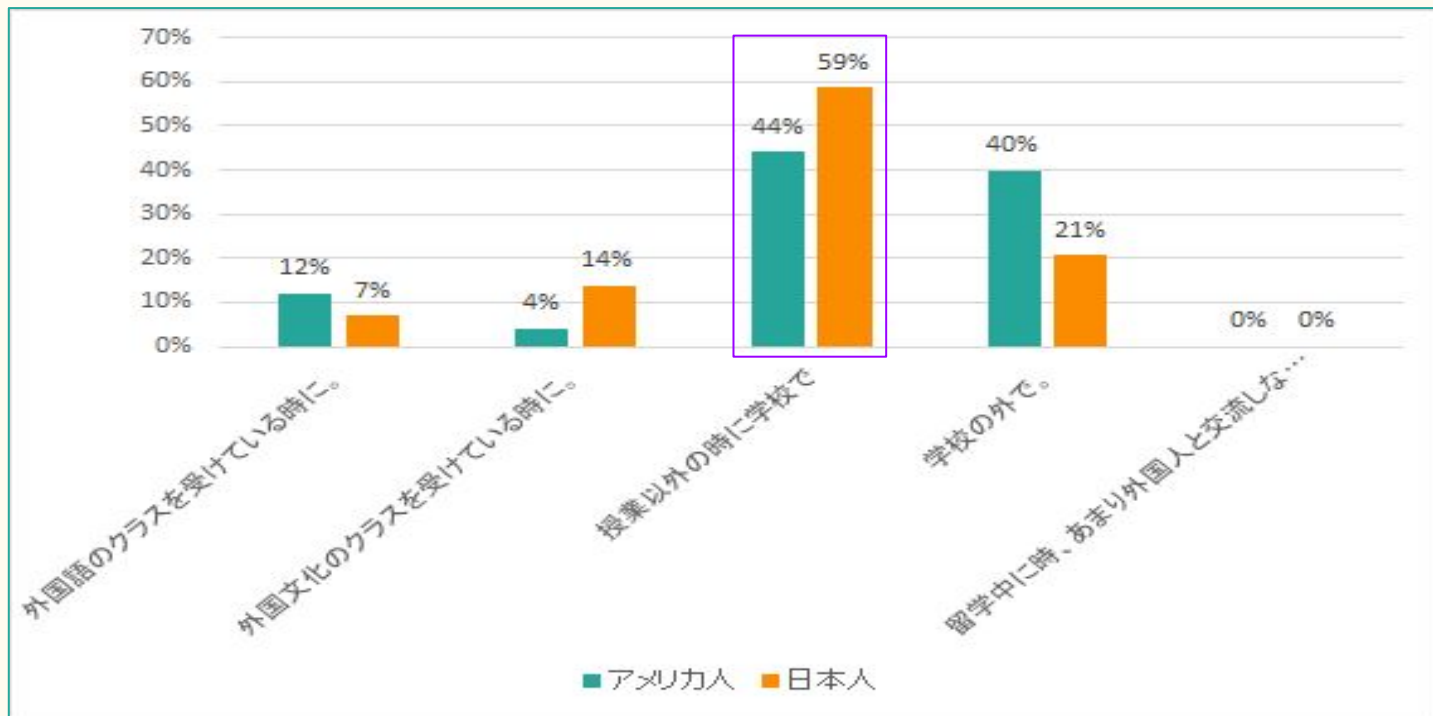
研究質問1まとめ

- 留学先の外国語の授業の方が母国での外国語の授業より実生活で使える言語を習得する。
- 留学先では学生は授業外でのコミュニケーションする機会が多い。
- 留学先の外国語の授業は学生の言語への自信や成長に大きく影響する。
- 日本人の学生は母国での大学で英語を使う傾向がある。

研究質問二

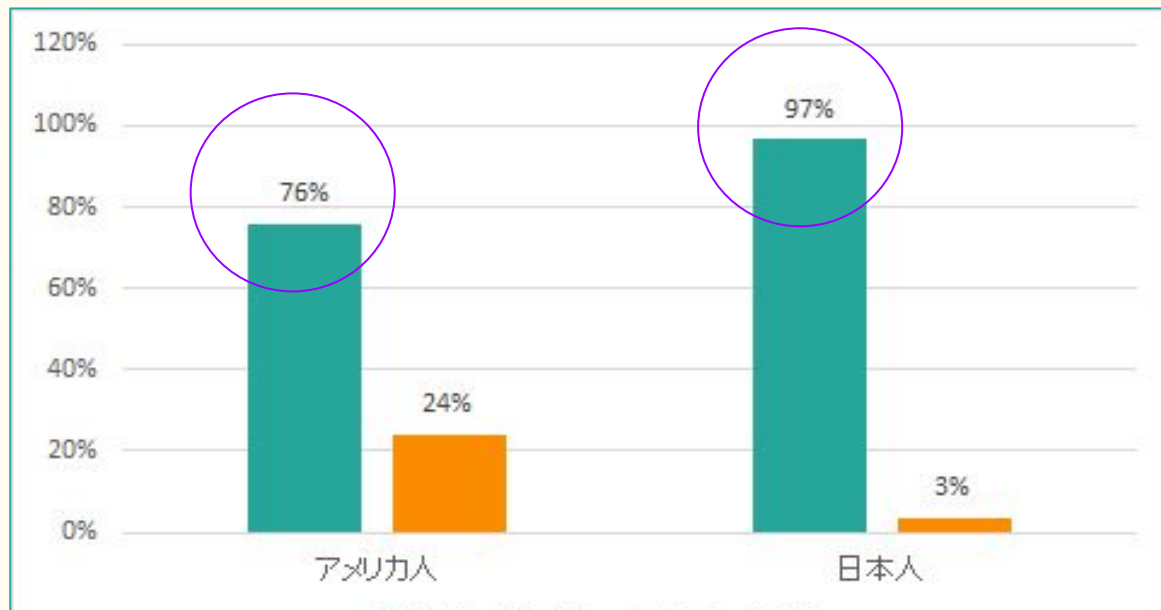
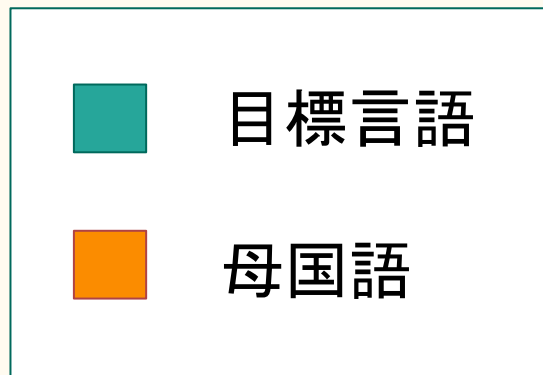
外国語授業の中では習得できず、留学により習得できる異文化理解にはどのようなものがあるか？

留学先の大学のどこでその国の人と一番多く交流しましたか？



留学先の大学で、両国の 大多数の学生は 授業以外の場で交流をした。例えば食堂にいる時等。

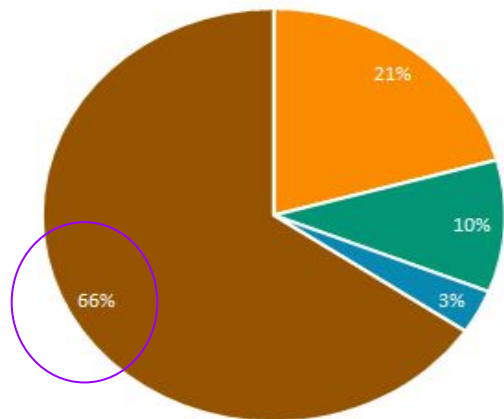
5B. 留学先のキャンパスでその国の人と交流する時(例: サークルやクラブ活動の時、食堂にいる時など)、どちらの言語をより多く使いましたか?



両国の学生は滞在国の言語をより多く使う。

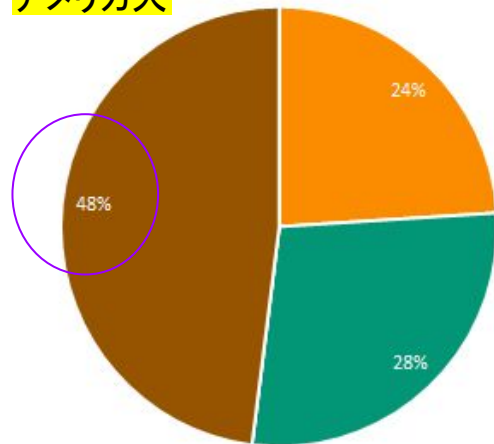
アメリカ文化や日本の文化におけるタブーを学んだところ

日本人



- 私の国で外国語の授業は異文化についての授業を受けている時に学んだ。
- 留学先で外国語の授業は異文化についての授業を受けている時に学んだ。
- 私の国で授業以外の場で学んだ。(例: 映画館やショッピングモール、レストラン等。)
- 留学先で授業以外の場で学んだ。(例: ホームステイや寮、映画館やショッピングモール、レストラン等。)

アメリカ人

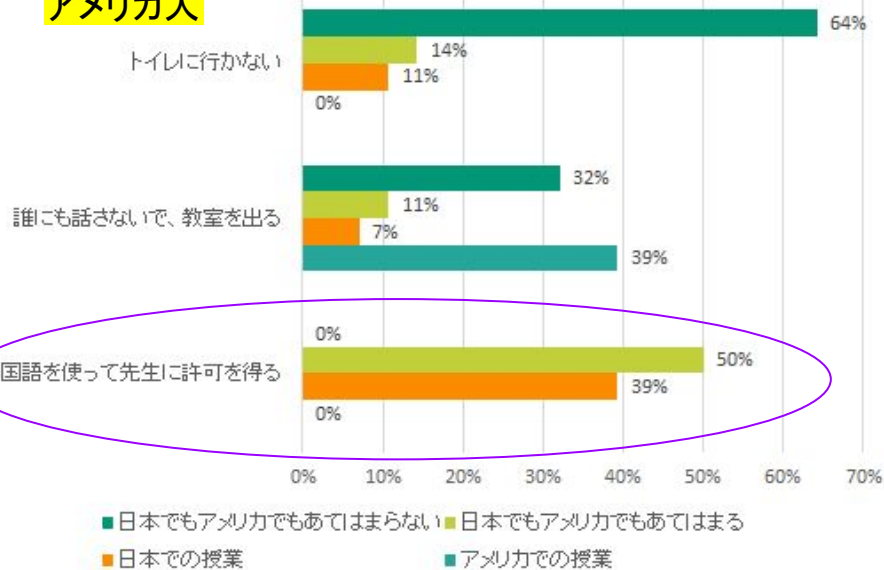


- 私の国で外国語の授業は異文化についての授業を受けている時に学んだ。
- 留学先で外国語の授業は異文化についての授業を受けている時に学んだ。
- 私の国で授業以外の場で学んだ。(例: 映画館やショッピングモール、レストラン等。)
- 留学先で授業以外の場で学んだ。(例: ホームステイや寮、映画館やショッピングモール、レストラン等。)

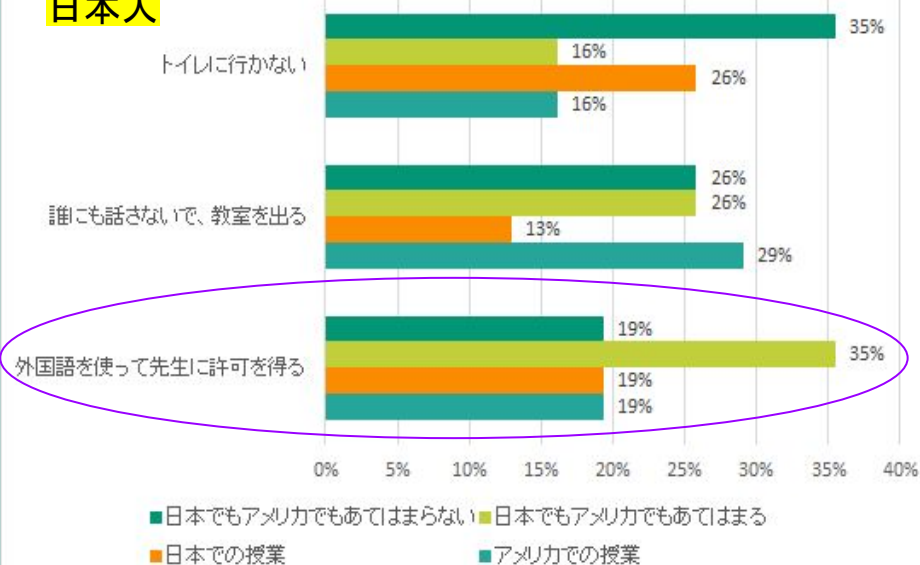
大多数のアメリカの学生と日本の学生は、留学先の授業以外の場で学ぶことが多い

次の状況で、あなたはどうしますか： 外国語の授業を受けている最中、トイレに行きたくなってしまいました。

アメリカ人



日本人



大多数の日本にいるアメリカ人(89%)とアメリカにいる日本人(54%)はトイレに行く許可を得る。つまり、留学生はその国の文化にあった行動をする。

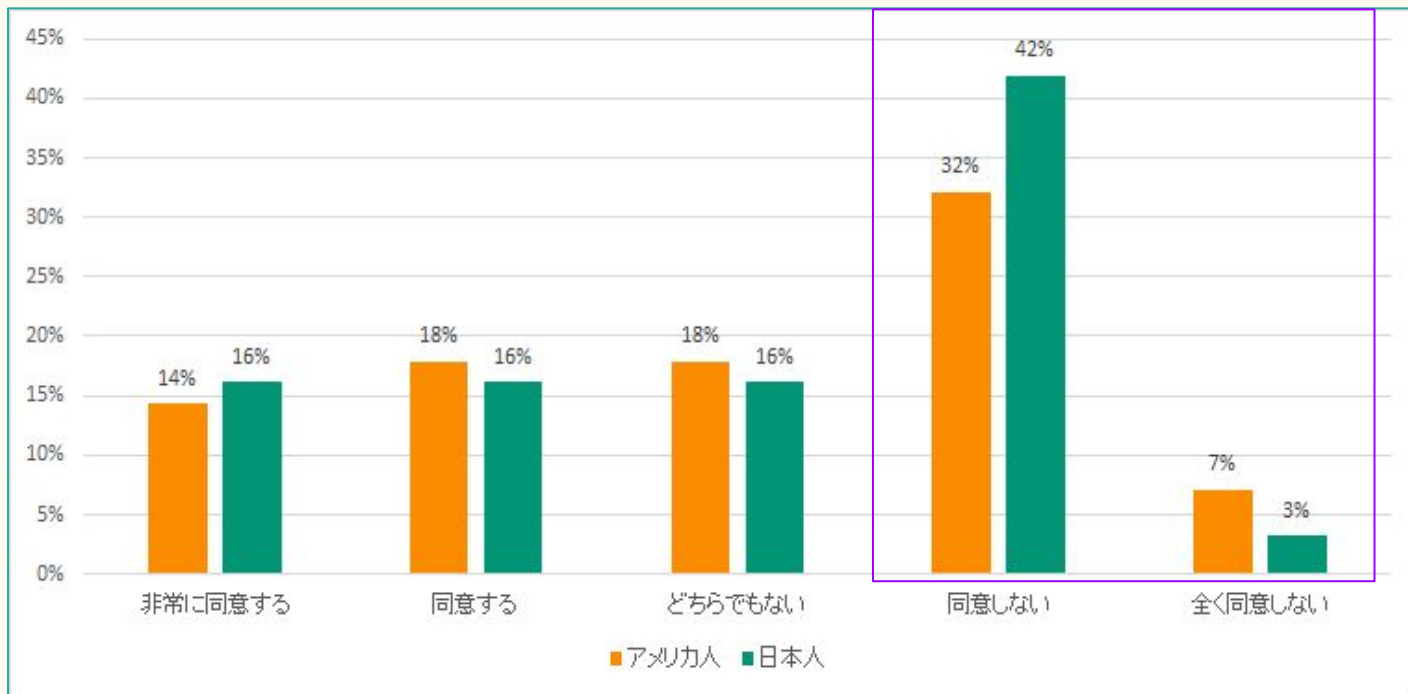
研究質問2まとめ

- どちらの国の学生も留学先での振る舞いを学ぶため、留学は異文化への理解力が深まる。
- 留学することで外国語に自信を持つようになる。またクラス外で文化を学ぶ機会が多い
 - 日本に留学したアメリカ人の日本語のクラスでは先生以外は外国人であるため、日本人との対人コミュニケーションは少ない。
- 異文化交流においてアメリカの学生は日本ではあまり日本語を使わない傾向があるのに対し、日本人学生はアメリカで英語を使う傾向にある。

研究質問三

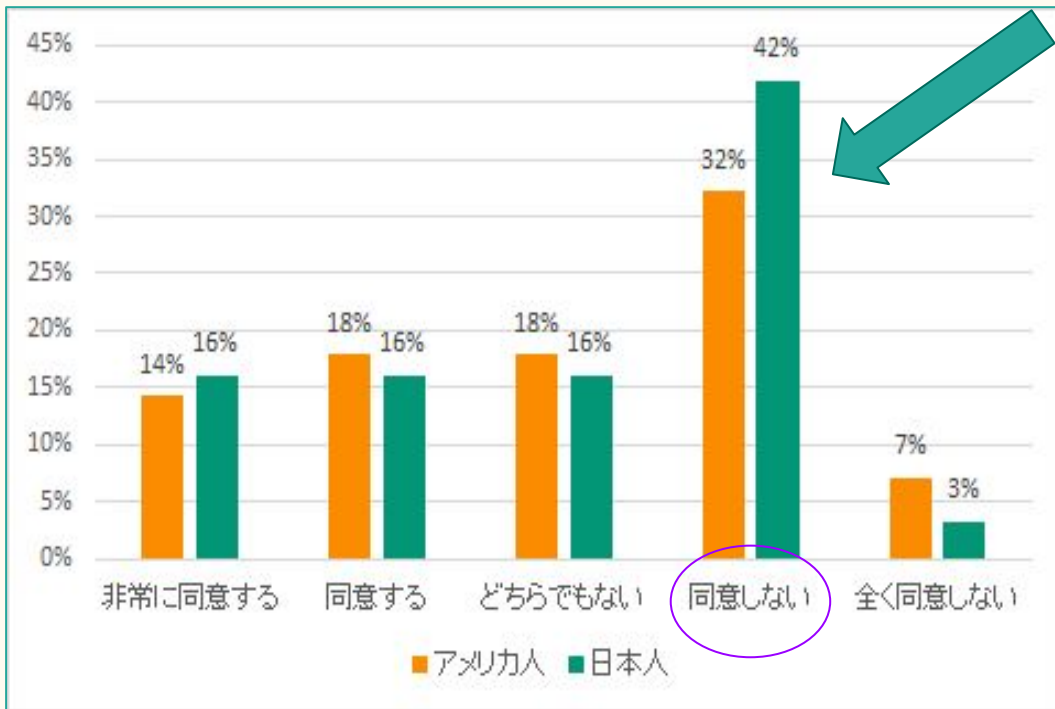
どのような文化的偏見が適切なコミュニケーションに影響を与えるのか？

次の文にどの程度同意しますか?『デリケートな話題において、新しい語彙・文法を使い、間違えても気にしない傾向がある。』



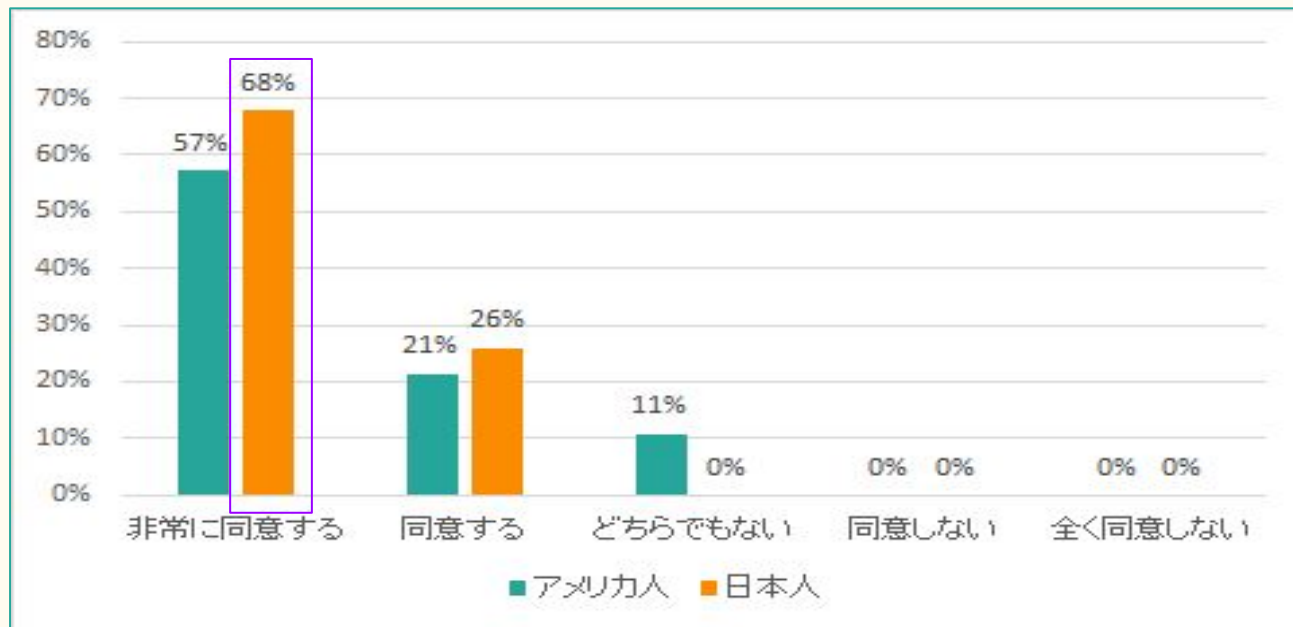
日本人もアメリカ人もデリケートな話題で語彙や文法を間違えるのは良くないと思っている。

分析: 異文化コミュニケーションにおけるリスク



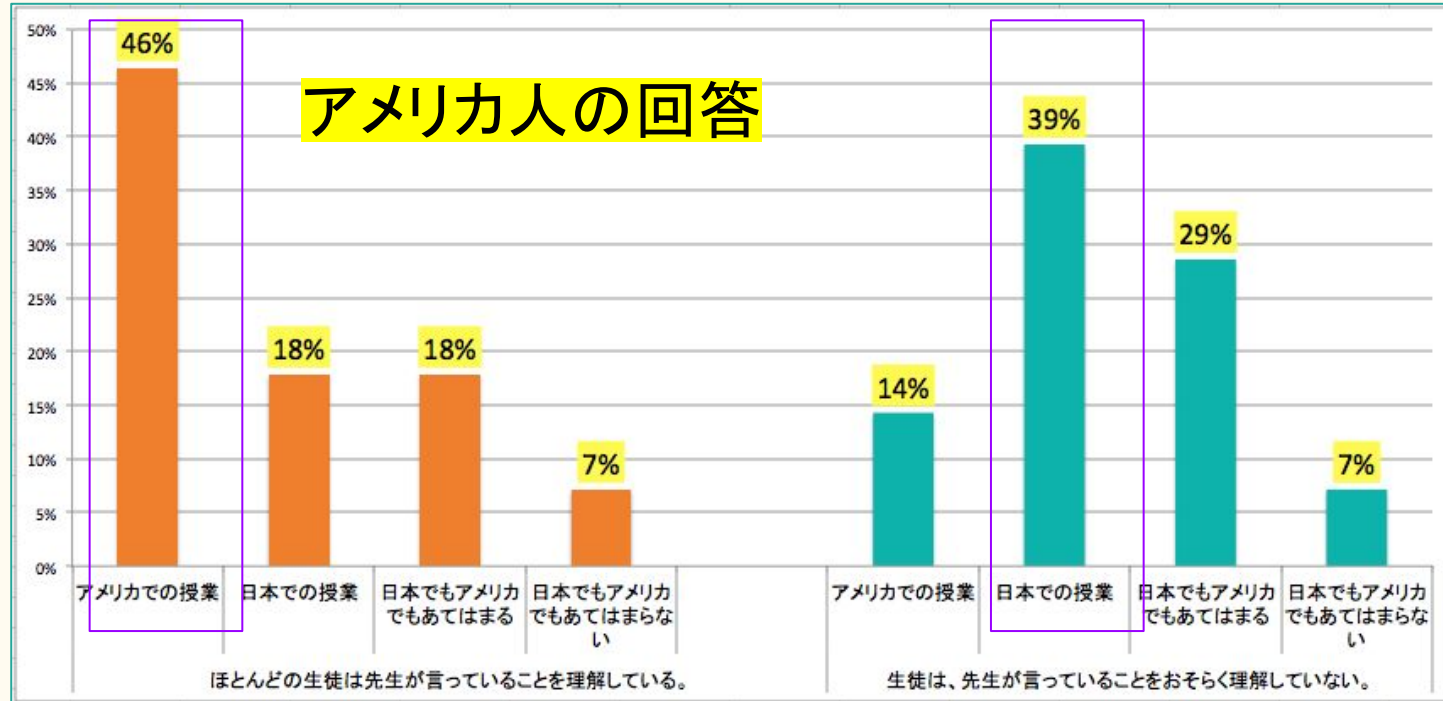
- ホフステッドの調査結果とは異なる
- アメリカ人も、日本人も滞在国の人と話す時に、デリケートな話題で語彙や文法を間違えてはいけなないと考えている。

『違う文化の人と話す時に友好的、または協力的な関係を築くことが大切だ。』



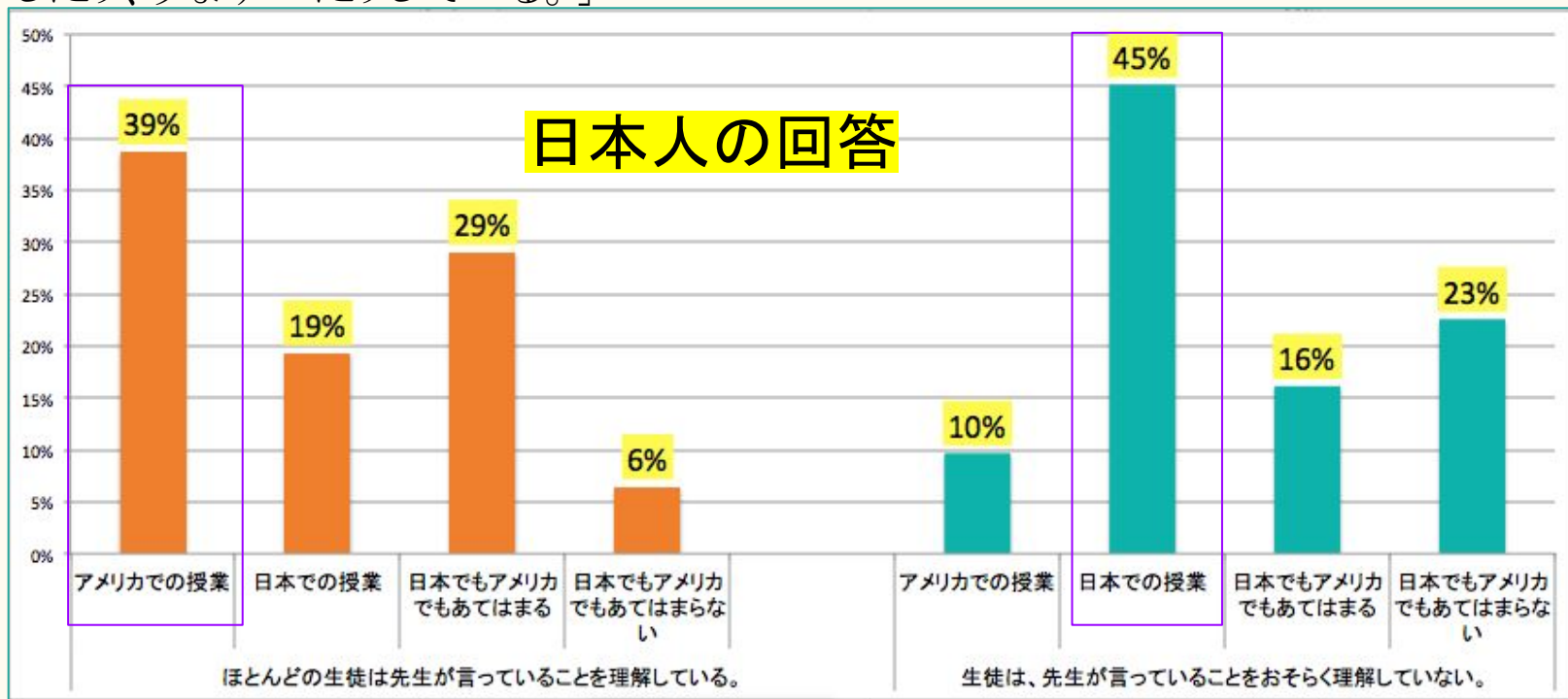
日本人もアメリカ人も方がアメリカ人も違う文化の人と話す時にできるだけ相手とつりあった会話をすることが大切だとしている

次の状況で生徒は先生が話していることをどのくらい理解していると思いますか？「あなたの外国語の授業で先生があるコンセプトを説明している際、多くの生徒がニコニコしたり、うなずいたりしている。」



アメリカでは先生が言っていることを理解していると判断する一方、日本では理解しているとはかぎらないことがわかりました。

次の状況で生徒は先生が話していることをどのくらい理解していると思いますか？「あなたの外国語の授業で先生があるコンセプトを説明している際、多くの生徒がニコニコしたり、うなずいたりしている。」



日本人はアメリカの授業で学生が頷くのは授業を理解しているという意味だと解釈するが、日本ではおそらく理解しているとは限らないと回答。

研究質問3まとめ

- ホフステッドの研究結果とは異なり日本人はアメリカ人と同じように異文化に於いても繊細な課題を話している時には語彙や文法の正確さにはこだわらない。
- 日本人は慎重に行動するというホフステッドの結果の逆でアメリカ人の方が異文化に於いてはその国の文化を尊重し行動することが大事だと思っている
- 相槌などはアメリカでは話の内容が理解していると判断されるが日本ではそうとは限らないという判断は変わらない。
- 両国の学生は異文化のバイアスはコミュニケーションには支障がないとしている。

結論

- 留学先で日本人の学生は話すことに自信がない場合、より多くの機会話す努力をする。
- 留学先でアメリカ人の学生は話すことに自信がない場合、あまり話そうとしない。
- 状況に於いて使われるコミュニケーションのスタイルに違いはなかった。
- 母国での外国語の授業では対人関係、異文化コミュニケーションについての内容が欠けている。
 - 母国の外国語の授業内で言語学習者が外国語話者と交流する機会があるべき。

結論

- 母国での外国語の授業ではターゲット言語言語だけで学ぶ機会が少なく、その国での適切なふるまいや、デリケートな話題を学ぶことは難しいようである。
- 留学先の外国語のクラスを受講することにより、言語能力に自信を持てるようになる。
 - 異文化交流やデリケートな話題について話す機会がある
 - しかし留学先の外国語の授業内で、その国の学生と交流することはあまりない。

研究の限界点

- 日本人の学生と、アメリカ人の学生と言語学習期間が同じではなく日本人の方が長い場合言語への自信の高さに影響があったかもしれない
- 回答者がアメリカで英語を学習している学生と日本に留学したアメリカ人なので一般化はできない
- ホフステッドとラムジーの研究は古く、文化的偏見とコミュニケーションについての近年の研究論理に基づき再調査する必要性がある

将来の研究課題

- 日本とアメリカに加えてもっと多くの国の文化を含めた幅広い調査をしたい。

ご清聴ありがとうございます。

質疑応答

参考の文献:

American Council on The Teaching of Foreign Languages. (n.d.). About the American Council on the Teaching of Foreign Languages. Retrieved December 2, 2015, from <http://www.actfl.org/about-the-american-council-the-teaching-foreign-languages>

An Introduction to the Intercultural Development Inventory (3.28 minutes) | Intercultural Development Inventory. (n.d.). Retrieved October 21, 2015, from <https://idiinventory.com/video/an-introduction-to-the-intercultural-development-inventory-3-28-minutes/?id=357>

Clauss-Ehlers, C. (2006). *Diversity training for classroom teaching* : A manual for students and educators. New York ; Berlin: Springer.

Education and the Language Gap: Secretary Arne Duncan's Remarks at the Foreign Language Summit | U.S. Department of Education. (n.d.). Retrieved December 2, 2015, from <http://www.ed.gov/news/speeches/education-and-language-gap-secretary-arne-duncans-remarks-foreign-language-summit>

Global constructions of multicultural education: Theories and realities. (2001). Mahwah, N.J.: L. Erlbaum Associates.

Grant, C. A., & Lei, J. L. (2001). *Global Constructions of Multicultural Education : Theories and Realities.* Mahwah, N.J.: Routledge. Retrieved from <http://search.ebscohost.com/login.aspx?direct=true&db=nlebk&AN=63037&site=ehost-live>

Hanzawa, Chiemi. *Listening behaviors in Japanese: Aizuchi and head nod use by native speakers and second language learners.* PhD (Doctor of Philosophy) thesis, University of Iowa, 2012. <http://ir.uiowa.edu/etd/3463>

参考の文献:

Hammer, M. , Bennett, M. , & Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity: The intercultural development inventory. *International Journal of Intercultural Relations*, 27(4), 421-443.

Hidden curriculum (2014, August 26). In S. Abbott (Ed.), *The glossary of education reform*. Retrieved from <http://edglossary.org/hidden-curriculum>

Horie, M. (2000). Intercultural Education for Development through Intercultural Experience:Theories for Practice. *The Bulletin of the Center for International Education,Nanzan University*, 1, 31–46.

Interpersonal Communication. (2011) (2 edition). New York: McGraw-Hill Education.

International Perspectives on Education. (2007). [Bronx, NY]: H.W. Wilson Co.

Koteková, D. (2013). CONFIDENCE IN THE FUNDAMENTAL ROLE IN LEARNING A FOREIGN LANGUAGE. *Journal on Efficiency and Responsibility in Education and Science*, 6(2), 84–104. <http://doi.org/10.7160/eriesj.2013.060203>

Klopf, D. (1991). Japanese communication practices: Recent comparative research. *Communication Quarterly*, 39(2), 130-143.

Kruse, J. , Didion, J. , & Perzynski, K. (2014). Utilizing the intercultural development inventory® to develop intercultural competence. *SpringerPlus*, 3(1), 1-8.

Lauridsen, K. (2010). The multilingual and multicultural classroom. *European Journal of Language Policy*, 2(1), 142.

参考の文献：

Matsumura, A. (1995). *Daijisen*. Tōkyō: Shōgakkan.

Midooka, K. (1990). Characteristics of Japanese-style communication. *Media, Culture & Society*, 12(4), 477-489.

Mitchell, B. , & Salsbury, R. (2000). *Multicultural Education in the U.S. : A Guide to Policies and Programs in the 50 States*. Westport, Conn.: Greenwood Press.

Ramaraju, S. (2012). Psychological perspectives on interpersonal communication. *Researchers World*, 3(4), 68.

Ramsey, S. Interactions between North Americans and Japanese: Considerations of Communication Style. (n.d.). Retrieved October 21, 2015, from <http://homes.lmc.gatech.edu/~herrington/classes/4406f2000/ramsey.html>

Ramsey, S. (1979). Nonverbal behavior: An intercultural perspective. *Handbook of Intercultural Communication*, 105-143.

Rethinking Multicultural Education : Case Studies in Cultural Transition. (2002). Westport, Conn.: Bergin & Garvey.

Schnickel, J., Martin, R., & Maruyama, Y. (2010). Perspectives on Studying Abroad : Motivations and Challenges. *Language, Culture, and Communication : Journal of the College of Intercultural Communication*, 2, 103–120. <http://doi.org/10.14992/00005748>

謝辞

- 関根先生と斎藤先生本当に感謝しています。
- 長尾・玲奈と山崎・由理本当にありがとうございました！